
旭川市学力向上 授業ポイント集

子どもの資質・能力を育成するための
ICT活用に向けて

変化が激しく、先行きの予測が困難な社会において、子どもたち一人一人が思い描く未来を創造することができるよう、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」を通して、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善を図り、必要となる資質・能力を育むことが求められています。

こうした授業改善を進めるためには、ICT端末を効果的に活用した取組が必要であり、この度、本市の学校で推進している、「学校力向上に関する総合実践事業」、「リーディングDXスクール事業」、「新しいかたちの学びの授業力向上推進事業」の取組から授業づくりの視点等をまとめました。

授業DXのポイント

- クラウドの活用…クラウドを活用することで共同編集や他者参照などが容易にできるようになります。大人数でのコミュニケーションを同時に行うこともできます。また、クラウドを有効活用することで授業での資料配布、情報の共有などを速やかに行えるようになり、その分の時間を子どもたちが自分でじっくりと考える時間や友達と交流する時間に使えるようになります。
- 汎用的なアプリケーションの利用…ICT端末に最初からインストールされている汎用的なアプリケーションで、授業改善を十分に行うことができます。汎用的であるため、基本操作を覚えやすく、大人になってからも活用できること、教師も扱いやすいことなどのメリットが多くあります。
- 各教科等の見方・考え方を生かす…授業でICT端末を活用する場合においても、各教科等の指導で大事なポイントとなる見方・考え方を生かした授業づくりを意識しましょう。

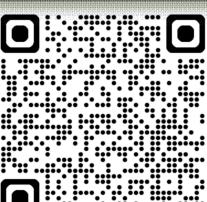
授業DXを進めるために まずは校務から

授業DXを推進するためには、教職員が日常の校務の中でデジタルツール（クラウド機能や共同編集機能）を積極的に活用し、自然な形でスキルを身に付けることが効果的です。

日常の校務からデジタルツールを活用することを、校務DXと呼んでいます。校務DXを推進することで、教員がデジタルツールの利便性を体感し、使い慣れることで、授業DXへとつなげることができます。

校務DXの実践例 ~旭川市リーディングDXスクール事業ホームページ~

校務DXの実践例の一部を紹介しています。右の二次元コードから見る



ことができます。情報共有をクラスルームやチャットで行う簡単な取組や、職員会議でのスプレッドシート活用事例（事前の質疑応答）などを紹介しています。学校全体の事務作業の効率化を促進し、教員の業務負担の軽減につながる取組としても参考にしてください。

「子どもの資質・能力を育成するためのICT活用に向けて」Q&A



Q1 学習の見通しをもたせるために大切なことは？



A1 子どもと学習計画を共有してみましょう。

以下のことを意識して学習計画を立て、共有できるようにすることが大切です。

- ・単元や1単位授業時間での学習のゴール（目指す姿）、見通し、必要な資料
- ・個別学習や協働学習場面の設定
 - 何を明らかにするための活動なのか（各教科の見方・考え方と関連）
 - 必要な学習訓練ができているか
- ・個々の学習状況に対応するための視点
 - 子どもの活動を価値付けるための見取り
 - 課題に対する自己調整を促す振り返りの設定

子どもと学習計画を共有する

（クラスルームの活用例）

～教科・単元・子ども達の実態に合わせながら、学び方を更新していきましょう～

教科・単元名・時数

- ・学習課題や目標
- ・意識させたい視点（見方・考え方）

〈学習の流れ〉を提示しておくことで、指示が減り、発問も精選されます。

また、子どもが自力で学習を進める時間が増える分、教師による個々の見取りや支援を充実させるようにします。

- ・前時までの学習記録（まとめ・振り返り）
- ・学習コンテンツ（外部HPや動画など）

国語：きいて、きいて、きいてみよう（4時間目）

○ すべての生徒

課題
それぞれの役割の工夫やよさを確かめ、インタビュー本番に備えよう。
視点
話の流れ 質問の意図 要点
目標
それぞれの役割の工夫やよさがわかり、以前に決めた自分の目標を見つめ直す。

〈学習の流れ〉

- ①課題設定
 - ・学習課題、流れを確認する。
(クラスルーム、スプレッドシート)
- ②情報の収集～③整理・分析
 - (1)インタビュー動画から、記録者としてのメモに挑戦する。（ノート／ふきだしきん）
(2)P48～49の会話文から、「きき手」と「話し手」の工夫やよさやに線を引く。
(教科書)
 - ④まとめ・表現
 - ・(1)と(2)について、友達と比べる。その後、全体で確認。
 - ・前回の質問メモを見直す。（スライド：まとめ3）
 - ・視点をもとに、自分の目標（ノート：2時間目のまとめ）を見つめ直す。
 - ・スプレッドシートに、次の時間のインタビュー目標を入力する。
 - ⑤ふり返り
 - ・次回の確認。

⊕ ふりかえりシート「きいて～」
生徒がファイルを編集できる

□ きいて～まとめ3
生徒がファイルを閲覧できる

⟳ インタビューの様子！広がる学び・深まる学び



Q2 振り返りの充実に向けて大切なことは？



A2 振り返りの共有と蓄積を工夫してみましょう。

子ども一人一人に、自己調整して主体的に学ぶ力を育むためには、学習の振り返りを充実させることが必要です。学習したことの意味を考え、身に付いた資質・能力を自覚し、新たに生まれた疑問などから次の学習課題を考えることができるように指導することが大切です。この振り返りの充実に向け、クラウド機能を活用することで、振り返りを「共有」「蓄積」することができます。「共有」することで、友達の考えを読んで考えを広げることができますとともに、「蓄積」することで、自己の学びの変容に気付くことができます。

クラウド機能を活用した振り返り

クラウド機能を使い、スプレッドシートやナンバーズなどの表計算ソフトを共有できるように設定することで、白紙の状態から、互いの考えをリアルタイムで見合うことができます。また、一人一人の振り返りを蓄積することにより、前時の振り返りと比較し、学びの変容に気付いたり、次時の学びを見通したりすることができます。



Q3 ICT端末は毎時間使うの？



A3 子どもの実態や目的によって使い分けましょう。

ICT端末については、手段として活用するものであり、毎時間使うことが必須ではありません。将来的には子どもが自ら考え、紙とデジタルの双方の良さを生かし、自らの学びに合った方法で上手に使い分けていくことができるようになることが大切です。

そのためには、例えば、小学校低・中学年では、ノートとICT端末を組み合わせた学習活動を通して、ICT端末に触れる機会を増やし、その楽しさや便利さを体験させながらそれぞれの違いを理解させることが必要です。小学校高学年から中学校では、ノートとICT端末それぞれの特性を深く理解し、学習内容や目的に応じて使い分けることができるよう指導していくことが重要です。

子ども自身が学ぶ方法を選べるように

これからもノートや漢字練習帳・学習ドリルなどを使用して学習する大切さは変わりません。しかし、ICT端末の扱いに慣れてくると、「考える場面では自在に書ける紙がいい」「後で整理して直せるからICT端末にまとめたい」など、子ども自身が紙とICT端末を使い分けて活用することができるようになります。紙とICT端末のどちらかに偏ることなく、学ぶときに何を使うかを選べるようにすることが大切です。



Q4 ICT 端末があれば教科書は必要ない？



A4 教科書は主たる教材として活用が必要です。

教科書は、法律により使用義務が課せられている唯一の教材であり、効果的に活用することが必要です。子ども一人一人に応じた学習活動などに取り組ませる場合においても、教科書には、本文等の文章や写真、図、表などに多くの必要な内容が散りばめられており、子どもが教科書をしっかりと読み取ることは、各教科で求められる資質・能力はもとより、学習の基盤となる情報活用能力などの育成を図ることにつながります。

教科書から情報を読み取る

例として社会科では、教科書の大切なところにアンダーラインを引き、必要な内容を読み取ることができるようにします。文章と資料との関わりなどは、線でつなぐなどして思考を整理しやすくなります。見つけた情報は、フィグジャムなどのホワイトボードアプリに入力すると、整理・分析の活動が行いやすくなります。



Q5 教師の役割として意識する視点は？



A5 ファシリテーターの役割も意識しましょう。

子ども一人一人の学びを最大限に引き出すためには、「ティーチャー」として子どもに一斉指導する役割も必要ですが、子どもが主体的に学ぶ場面においては「ファシリテーター」として、子ども一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」を意識することも必要です。教師は、子ども一人一人の実態や進捗状況に合わせて支援することが大切です。

子ども一人一人への支援の一層の充実

授業づくりでは、一斉指導の場面と子どもが学び進める場面を考えて単元構成をすることが大切になります。

子どもが学び進める場面では、一人一人の子どもの異なる学習状況を把握するために、ICTを活用し、実態に合わせて支援します。また、教師と共に学習に取り組むことで安心して進められる子どもには、適宜声を掛け、本時の目標達成に向けて支援します。





Q6 子どもの考えを深めるために大切なことは？



A6 アウトプットの場面を増やしましょう。

一人一人の考えを深めるためには、アウトプットの場面を多く設定することが大切です。クラスルームやチャットなど、それぞれの特徴を生かしながら活用することで、全ての子どもが頭をフル回転させ、アウトプットすることを目指しましょう。

全ての子どもにアウトプットの機会を

全ての子どものアウトプットの機会を保障する手段として、クラスルームを活用することも一つの方法です。更に、チャットなどの表現手段を増やすことで、瞬時に他者へのアウトプットが可能になります。

また、他者との交流も、一目で数多くの友達の意見を見る事ができるので、より自分に合った相手を探して交流することもできます。考えをもつのが難しい子は他の子の書き込みを参考にすることも可能です。文字入力であれば活躍できる子どももいることが期待できます。情報交換することにより、考えを広げたり深めたりしていくことができます。

教師はこれらのコミュニケーションを価値付けることが大切です。また、オンライン上のマナーについて、子どもと一緒に考えながら指導することが必要です。



Q7 アウトプットの機会を増やすことで他にどんな効果が期待できるの？



A7 育まれる力の一つとして 「自分の考えを表現する力」の育成に期待がもてます。

子どもたちが「知識・技能」を習得し、それを基に自分の考えをアウトプットする機会を増やし、友達に対して自分の考えを伝えながら協働的に学びを深める場面を大切にしていくことにより、旭川市の子どもたちの課題となっている「自分の考えを表現する力」を育んでいくことが期待できます。

知識・技能の習得につながる

知識・技能の習得に向けては、子どもの実態や発達段階を踏まえつつ、反復練習もしながら、確実に定着させることが大切になります。

こうした学習に加え、子どもたちが覚えたことを課題解決に活用し、その後、友達に説明するなど、アウトプットの機会を増やすことで、「生きた知識」となり定着しやすくなります。





Q8 他者参照させると、自分で考えない子どもが育つのは？

A8 他者参照を行うと多くの効果が期待できます。

他者参照とは、取組の途中や交流場面などにおいて、友達の意見や情報、成果など、他者の考え方などを参考して学ぶことをねらって行います。

他者参照を積極的に進めている学校からは、

- ・友達の学びを可視化することができる。
- ・新たな発見や解決策を見つけることができる。
- ・多角的な視点をもつことができる。

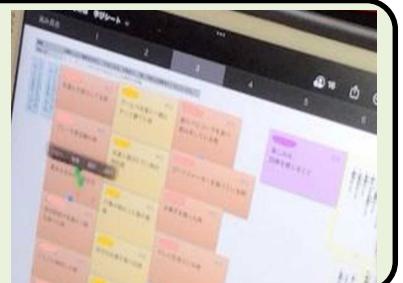
などの効果のほか、これまで授業中に一人だけで学習を進めることができた子どもたちが、

- ・友達の考え方や取組の様子を参考することで、自分なりの考え方をまとめることができます。
- ・自分の考えに自信をもって学びを進めることができます。

などの効果が報告されています。

共同編集機能の活用

オクリンクプラスのみんなのボードや汎用的な各種アプリの共有機能を活用し、他者参照を繰り返すことを通して、一人一人が自分で学びを進めたり、友達のよい考え方から学びを深めたりできるようになることが期待できます。



Q9 文字の入力方法は自由でよい？



A9 タイピングスキルを身に付けることを目指しましょう。

タブレットでの文字入力は、これからの中学校・中学校での指導を通して、子どもたちが楽しく文字入力のスキルを習得し、最終的にタイピング（キーボードによるローマ字入力）ができるようになっていくことが大切です。また、発達段階を考慮し、段階的にスキルが習得できるように指導することが重要です。

小学校低学年…音声入力・手書き入力→日本語50音キーボード・タイピング（ローマ字入力）

小学校中学年…日本語50音キーボード・タイピング（ローマ字入力）

小学校高学年…タイピング（ローマ字入力）※1分間に40字程度

中学校…タイピング（ローマ字入力）※1分間に60字程度



文科省資料「教育DXに係るKPIの方向性（R6.2.26）」より

※ただし、特別な配慮が必要な子どもに対しては、個に応じて、適切な方法を選択する必要があります。

日常的にタイピングの指導を

タイピングのスキルを身に付けるためには、日常的にタイピングを練習することが必要です。

- ① タイピングソフトの使い方を指導する。
- ② 朝学習・隙間の時間・家庭学習で練習する（視写入力）。
- ③ 授業で自分の考えをタイピングする（思考入力）。

※タイピング検定などの取組を行うことも効果的です。





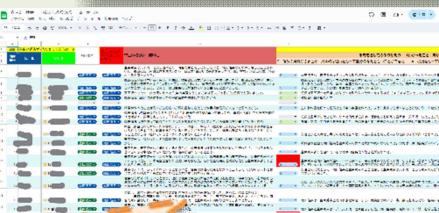
Q10 今後充実すべき授業スタイルは？

A10 探究的な学習過程の授業を大切にしましょう。

子どもに必要となる資質・能力を育むためには、①課題や問題を自分たちで見つけること ②解決に必要な情報を整理・分析すること ③自己調整しながら学びを進めていくことなど、子どもが主体的に学習に取り組むことができるよう、探究的な学習過程の授業スタイルを各教科の特質に応じながら充実することが大切です。

探究的な学習過程と 具体的な学習活動の例

クラスルームで本時の活動の流れや
ゴールを提示する（A1参照）



振り返りでは、スプレッドシートなどを活用すると、他者の学びがひと目で分かる



「課題の設定」では、子どもたちが一人一人課題をもつことが大切です。共通の大きな課題に沿って個人の課題を考えましょう。また、1時間や1単元の見通しがもてるよう、クラスルームなどで学習の流れについて知らせると効果的です。

課題の設定

「振り返り」は、学習の流れに合わせて適宜行います。自分の学びの過程を子ども自身が意識でき、学びの調整ができるようにしていきます。

振り返り

情報収集

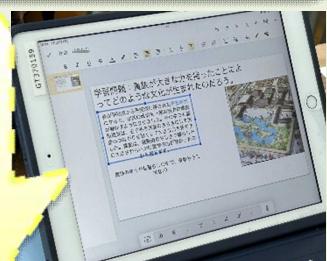
まとめ・表現

整理分析

「まとめ・表現」では、個人の課題についてまとめていきます。友達との交流を通してブラッシュアップするような場面があるとよりよいです。

「整理・分析」では、集めた情報を見方・考え方を生かして、課題解決のための考えを組み立てます。途中、他者参照を取り入れると効果的です。

文字数をたくさん入力できる、スライドやドキュメント、ページなどを活用してまとめを行う



フィグジャムやフリーボードなどのホワイトボードアドリブを使って教科書などから得た情報を整理・分析する



教科書の大事なところにアンダーラインを引く

